

日本語教育と異文化伝道 ②

日本語教育に対する信念

主任研修で知り合ったある日本語学校の先生から研究のために話を聞かせてほしいと頼まれた。私でよければと気軽に引き受け、2021年4月、コロナ禍でもあるのでZoomで行うことにした。長年、日本語教育に携わってきて、どのような信念をもってやってきたのか自由に話してくださいと言われ、はたと困ってしまった。事前に質問事項を細かく聞いて準備していたわけでもないの、結局、天理教の日本語教育の歴史や自分が経験したことを話すことにした。この連載の中で歴史的なことは書いてきたこともあり、思い出しながら話すことにした。建学の精神や学校の設立の目的など、調べれば簡単にわかることだ。しかし、自分が日本語教育に携わってきて、どのような信念をもってやってきたかと問われれば、急にはうまく答えられない。日本語教育に携わる者なら誰でも、目の前のやらなければならないことをがむしゃらにやってきて、自分の日本語教育に対する信念を考えたことなど、ないのではないだろうか。そんなことがあったので、今回、温故知新ということで、天理大学選科が始まった頃の資料を探してみることにした。

日本語学校開校

1958年(昭和33年)11月26日付の『海外伝道部報』第21号に、天理大学選科初の入学式の記事が載っていた。天理教海外伝道部(現海外部)は当時、学校・寮を一体とした留学生の受け入れ準備を進めていたが、記念すべき第1回目入学式は同年10月1日で、12名の留学生(ネパールからの1名を除いて、いずれもハワイの日系人子弟)が出席した。岸勇一天理大学長、高橋道男海外伝道部長の祝辞があったことから分かるように、留学生受け入れには多くの関係者が携わってきたことが想像される。当時の様子は、専任講師だった前田喜代子氏の「海外留学生の毎日」という手記から窺うことができる。クラスは初級と中級と二つに分かれており、合同で行う授業もあったようだ。興味深いことが書いてあったので、少し引用する。

参拝後、全員ただちに合併教室にはいり、天理教教典の素読を致しております。先生が少し読み、それを皆で反復させておりますが、これは日本語に一日も早くなれるため、又知らず知らずの内にお道の心を身につけるため、解説はいたしてはおりませんが、近頃では生徒の方から何とかわかりたいと申しまして、伝道部から英文の教典をいただき、その日、日本語で読んだ章を、生徒が交替で読んでおります。

開校当初から、日本語の授業だけでなく、天理教の教理面の授業をどうするか、試行錯誤があったと思われる。現在では天理教海外部員の協力もあり、各言語別の教義の時間やおてふりの時間などもあり、充実したものになっているが、先人の地道な試行錯誤が積み重なって現在が続いているのかとも感じる。

開校当初の授業

開校当初の授業はどんな授業が行われていたのだろうか。前田喜代子氏の手記には次のように書いてあった。

授業は読本を中心に、作文・会話・書方・音楽・日本事情・文章病院・講読・講話・体育などヴァラエティをもたして

あります。“読本”は一週十五時間で、留学生達はこの時間に、正しい日本語・日本語らしい日本語を、語彙・語法から或は問答から応用作文からという風にして、学んでゆきます。

このうち、“読本”を現在のメインテキストである『みんなの日本語』に置き換え、体育の授業を除けば、開校当初から現在と近い形でやってきたようにも思える。ちょっと聞きなれない“文章病院”というのがあるが、スピーチを行わせ、悪い部分を“診断し、治療する”という指導のようだ。「やはり助詞と敬語が病気にかかり易いものの筆頭といえる」と述べているが、これは今も昔も変わらない。音楽では、天理教の「道の子」の歌、日本の童謡、日本で愛唱されている各国の民謡などを教えていたようだ。また特筆すべきものとして冬には長野県の菅平スキー場へ行き、天理大学体育学部の教授の指導で合宿のスキー実習が挙げられる。常夏の国から来た学生には貴重な体験だっただろう。それ以外にも、奈良や京都で行われるお祭りや行事に参加したり、史蹟見学なども行っていた。教員だけでなく、選科に関係する人たちの協力があって、当時の留学生は充実した日々を送っていたのであろう。当時の留学生の作文からもそれが伝わってくる。また卒業前には、天理教の先生の自宅で、日本家庭実習として1週間過ごすということも行われていたようだ。現在で言えばショートホームステイということだろうか。開校当初から、このように日本語教育の面でも生活の面でも細やかな対応をしていたことが分かる。

喜ばさずには帰されん

選科時代から脈々と続いている天理の日本語教育は、やはり携わる者の信仰心から来ているものが根底にあると言える。教職員は皆、ようぼく(9度の別席を運び、おさづけの理を拝戴した者)であり、いずれも天理教信者である。中山みき天理教教祖は、「この家へやって来る者に、喜ばさずには一人もかえされん。親のたあには、世界中の人間は皆子供である。」『稿本天理教教祖伝』(25頁)と語られた。この逸話は、人間から見れば“親”である親神のもとへ、“子”である人間が自らの親を慕って帰ってくるようなものであると喩え、親のような心で優しく接してあげてほしいと論しているものと、筆者は理解している。親から見れば子供は皆、かわいいのである。この“親心”の精神が、留学生の受け入れやまた日本語教育の根底に息づいていると言える。この精神は、教職員が留学生に対してだけでなく、留学生たち自身においてもまた、夏の「こどもおぢばがえり」、また正月の「お節会」で帰参者に対するひのきしん活動を実践する上でも根底に流れているといえる。冒頭でどのような信念をもってやってきたかと問われて困ったと書いたが、振り返ってみれば、「天理へ学びにやって来る学生に、喜ばさずには一人も帰されん。」が答えだったのかとも思う。



お節会ひのきしん